平成 27 年 4 月号　№462

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電 話（043）485-1801

東海道五十三次とリサイクル---- 板井　省司
終了「カレッジ16」---------- 松山　洋子
印西の獅子舞---------- 安保　昌浩
「第九」小考---------- 堤　源太郎

ああ　夫婦坂

金井　義彰

明治時代、警察官の鑑として讃えられた人物が佐倉警察署に勤務していた鈴木清助巡査である。明治23年4月、佐原郡役所で徴収した税金を川崎銀行佐原支店から千葉支店に運ぶことになり、警護を頼まれた佐倉警察署が任務を託したのが武術にすぐれ、とくに柔術では達人といわれた清助であった。

現金、一万数千円を逓送夫に背負わせ清助が佐倉を出たのが4月4日の午後4時ごろ。亀崎から内黒田を抜けて千葉へと向かった。千代田村栗山新田（いまの四街道市栗山）に来たときである。後ろから六尺豊かな男がついて来るのに気づき声をかけると、旦那と一緒だと安心なので同行させてくれという。官金略奪の気配が窺えるので警戒していたところ、日が暮れ薄暗くなって千葉郡都賀村（いまの千葉市若葉区西都賀）の通称、夫婦坂に差しかかったとき、男が清助目掛けて拳銃を発射した。その一発が腰部に命中、サーベルを抜いて立ち向かったが、他の一発が左上腕部を傷付けた。

それでも屈せず、男を追いかけ一刀を左肩に浴びせ、次に一刀両断と思ったが捕縛して取り調べたいと思いサーベルを捨てて男に組み付き拳銃をもぎ取ろうとしたとき、さらに一発が下腹部に命中した。瀕死の重傷を負い激痛に耐えながらも何と驚いたことに男を取り押さえ捕縛して歩いて行って一軒の農家をみつけ千葉警察署へ急報するように頼んでいる。

急を聞いて駆けつけた千葉警察署の署員に男を引き渡すと、さすがに力尽き事件発生から4日目の未明、収容先の病院で息を引き取った。行年三十一歳であった。

清助は佐倉城下袋小路、いまの暗闇坂の坂下辺りで佐倉藩士の子として生まれ、藩校西塾で学び二十歳のとき上京して日本橋区浜町で水泳教室を開いている。当時、宮内省の御用掛をしていた山岡鉄舟と親交をもっているが、鉄舟から案山子の絵を贈られている。この絵には「たふれても弓矢を捨てぬ案山子かな」という讃が書かれていたという。

これが契機になって一朝、有事の際は身を捧げて働かねばならぬと考え、警察官こそ理想の職業と思い警察官を志したという。清助が殉職して間もなく、心労のあまり夫のあとを追うように亡くなった妻とともに佐倉市新町の延覚寺に葬られているが、こんな立派な警察官がここ佐倉にいたことを忘れてはならないと思う。

露崎栄一著『夫婦坂輪廻の絆』他によって書きました。

（編集委員）

東海道五十三次とリサイクル

江戸時代には、東海道の江戸から京都間の約五百キロをわずか十三泊十四日で歩いた。男子が一日約三五キロ、我々には想像もつかないくらいの健脚だった。

大名行列はこれよりスピードはずっと遅い。薩摩藩や金沢藩の大名行列は二千～四千名で、列の長さは一・五キロもあったと。

東海道五十三次の宿場町で人は食べて寝るだけだろうか。肝心なのは用便のことである。異邦人のケンペル、ツンベリー、シーボルトらによる紀行文に、旅先のトイレのことや、雨上がりのぬかるんだ街道を誰が整備したかまで、事細かに書いてある。二～三里ごとに路傍に木葉葺きの小屋をつくり、そこで大名や身分の高い人たちが、休憩したり用便したりする。

近在の百姓たちがこれらのトイレ小屋を設置し、また道路の清掃を行い、毎日落ちてくる松葉や松カサなど、焚き物として利用する。馬糞は、百姓の子供が馬のすぐ後を追いかけ、まだ温もりのあるうちにかき集め、自分の畑に運んでいく。

すり切れて捨てられた人・馬のワラジは拾い集められ、ゴミとともに焼かれ、灰＝カリ肥料として使われる。

もちろん一般庶民用のトイレも百姓たちが自費でつくり、旅人に使ってもらった。この糞尿を少しでも多く集め、灰などと混ぜ合わせて肥料にしたのである。

当時は、江戸をはじめ全ての庶民が生活に必要なものをリサイクルによって賄っていたのだと。

それに比べれば、昨今の我々の生活では毎日がゴミの山である。消費しないからデフレになるのだと盛んに景気を煽って無駄使いを推奨する当節である。

（ユーカリが丘　板井　省司）

印西の獅子舞

印西の里山散策の途中に豊かな自然に触れながら６５０年前から伝わる獅子舞（印西市指定の無形民俗文化財）を春と秋に鑑賞する機会がありました。

年貢で苦しめられていた農民の喜怒哀楽の表現として、鎮守の森での叫びだと思いました。和泉の三頭獅子舞は八幡神社の境内で４月下旬に行われました。春の農作業の始まりとして、又、稲の籾蒔きが済んだ事を祝い五穀豊穣・家内安全・子孫繁栄を祈願して神前に奉納される獅子舞という事です。

頭髪に麻や鳥の羽を使った獅子（鹿）の面をかぶったオヤジ（親獅子）、カカ（母獅子）、セナ（若獅子）、の三頭の獅子が笛の音に合わせ踊り、腹に抱えた太鼓を打ちながら力強く踊ります。豊作を祈ると共に子孫繁栄の願いが込められています。踊りの途中に子供７～８人等が並び獅子と共に仮の川（橋）を渡る踊り（行為）がありましたが、子供達がすくすくと立派に成長する様願う民の叫びの様な気がします。大きなコイノボリが10匹程泳いでいる下での獅子舞でした。

中根のいなざき獅子舞は秋分の日（９月の例大祭）に和泉鳥見神社で奉納されます。秋の豊作に対する感謝を表し、さまざまな舞が演じられました。「いなざき」とは「稲の収穫を前にして豊作を願う」という意味があるそうです。

この獅子舞の珍しいところは獅子舞の他に道化役として「河童」がモノを持って踊る事で、この踊りの途中に子供が４人程踊りに加わり成長を祈願する内容でした。河童の道化役が登場とは何か伝統ある民話か神楽にある様な話だと思ったりしました。楽しい一時でした。

（井野　安保　昌浩）

終了「カレッジ16」

佐倉市民カレッジの16期生である私たちが、平成23年、卒業と同時に立ち上げた自主講座「カレッジ16」は、この3月、4年間の学びを閉じた。

76名の会員を以ってスタートした月1回の講座に、会員は弁当を持って集まり、どこか開放的な思いで授業を受け、会話や情報交換を楽しんだ。もともと2年計画で発足した講座であるが、続行を求める声が上がり、その声に応えているうちに回を重ね、ついに昨年度は第4年次に突入した。仲間とのつながりを求める会員の熱い思いを受け止め、新たな講座を用意するのは決して楽な作業ではなかったが、そこは多士済々、運営委員の底力が光った。人脈や情報収集に優れている、パソコンが得意、文章に強い、会計能力抜群、企画力旺盛…と頼もしい面々である。率直に意見を出し合い意思疎通を図る。先を見据え計画的に相談する。率先垂範で準備を進める。心地よい環境や組織力も徐々に高まっていく。こうした協力体制の下に動く組織があったからこそ、カレッジ入学という偶然の出合いでしかなかった仲間が、在学4年間と合わせ、8年間もつながってこられたのだと思う。ここで培ってきた仲間との絆も、運営委員の一員として微力ながら関わってきたことも大切な財産。どこかで今後の私を支えてくれるはず。

自主講座は去る3月、市内在住の新進ピアニストを迎えてのリサイタルで、格調高く締めくくる。盛大なお別れパーティーで、今度こそ「カレッジ16」は終了する。

寂しくもあり、嬉しくもある今年の幕開けである。

（大蛇町　松山　洋子）

「第九」小考

年末の風物詩といえば大掃除に紅白歌合戦、それにベートーベンの「第九」（交響曲第九番・合唱）が加わる。

とにかく日本人は「第九」が好きである。理由はいろいろ考えられるが、多くの人達と音楽の共体験ができるうえ音楽的価値に魅力があり、合唱歌詞の博愛・平和主義に共感を覚えるからであろう。

人気の高さは、音楽・演劇分野に於いて歌舞伎の「勧進帳」と双璧をなしており、両者とも確実に多くの観客を動員する。「勧進帳」は、襲名披露や新しい舞台の柿落しなど重要な興行を行う際には必ず上演され、「第九」同様大勢の観客が押し寄せる。

「第九」と「勧進帳」の人気の高さに、我が国の国民性を垣間見る思いがする。

一方年末に演奏会が集中するのは、オーケストラが終戦直後の貧しい時代に、〝餅代稼ぎ〟として演奏会を開いたことに由来する。現在では年末の演奏会はすっかり定着しており、聴く側にとっても明るく年末を過ごし、元気に新年を迎えるための大きなイベントとなっている。

音楽的には何といっても第四楽章が圧巻である。第三楽章までの主題を次々と弦楽器が打ち消した後、有名な『歓喜の歌』のメロディが静かに顔を出す。やがて全楽器が高らかに『歓喜の歌』を奏で、最初のクライマックスが訪れる。その後一瞬躊躇するようなメロディが続くが、それを振り切って独唱と合唱に突入していくのである。この展開が誠に素晴らしく、私は聴く度に胸の高鳴りを覚える。

皆さんも機会がありましたら是非「第九」をお聴きになり、元気を貰って下さい。

（千成　堤　源太郎）

４月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL０４３－４８５－１８０１

〒２８５－００２５　佐倉市鏑木町１９８－３

URL　http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

佐倉市上座の熊野神社をご紹介します。由緒を見ると、「創立は不詳なるもおよそ五、六百年前（西暦一四〇〇年頃）の創立と思われる」とあります。その時代は日本史でどんな時代だったのでしょうか、なんと室町時代から上座に鎮座していたことが伺い知れます。『すごいですね』

熊野神社とは熊野三山（熊野本宮大社、熊野速玉（はやたま）大社、熊野那智大社）の祭神を勧請された神社のことです。

自然信仰の聖地である熊野三山詣に平安時代は皇族・貴族らの参詣が盛んで、鎌倉時代は地方の武士が多く、室町時代に一般民衆が最盛期を迎えたようです。由緒の創立年代と合致します。上座総合公園に来られたら、左奥の山手の石段を上ると小さな社殿が鎮座しています。秋の例祭は十月十五日です。

（井手　季雄）

あとがき

４月がスタートしました。新たな気持ちで『なかま』の充実を目指したいと思います。

２月号の「一休」文中の京都大徳寺の塔頭真珠庵について、補足と紹介をします。

一休が命名した庵の名の由来は、雪が降りしきる破れ寺で修行しているとき、隙間から雪が入り込み、月の光に真珠のように輝いたという故事からとったといわれています。

ところが真珠庵は破れ寺どころか方丈、庫裏など立派で、気品のある静寂な雰囲気を醸し出しています。しかし一休は生前１日もここに住んだことがありません。大徳寺の他の庵の再建を先にしたのです。

真珠庵が建てられたのは一休没後10年のことでした。村田珠光の作といわれる七五三の庭、茶室の庭玉軒や一休像など、一休ゆかりの国宝や重要文化財が保存されています。

（岡本　治之）